令和2年度　カリキュラム・マップ（ディプロマ・ポリシーに対する科目の位置付）

学部名	通信教育部心理学部	学科名	子ども発達教育学科

子ども発達教育学科のDP（ディプロマ・ポリシー）

DP1	知識・理解	（1）子どもの心理発達特性や障害児の心理等を十分に理解し、子どもの主体的な学びを援助する専門知識を修得するとともに、一人一人の子どもにとって、よりよい保育・教育環境を計画的に構成することの意義を十分理解しています。 （2）子どもの保育内容・教育内容に関わる専門知識を身につけ、それらの相互補完的な複合的な理解とともに、子どもへの直接的な発達支援や、保護者への子育て支援の専門知識を修得しています。
DP2	思考・判断	授業や学外実習を通じて、自らの子ども観や保育観・教育観を形成するとともに、形成の経緯を振り返ったり、他者の子ども観や保育観・教育観と比較するなど、より望ましい子ども観や保育観・教育観を形成するための判断力を身に付けています。
DP3	技術・行動	保育・初等教育にかかわる各種の専門援助技術を身につけ、積極的に子どもや保護者と向き合い、専門職者としての責任を自覚した行動がとれます。
DP4	態度	保育・初等教育に携わる者として、子ども一人一人の個性や特性を尊重し、その成長発達を見守り、援助する姿勢を持つと同時に、常に専門職者としての知識や技能の向上に意欲を持ち、また人間としての自らの自己成長に努力する態度を身に付けています。

※学科のDP達成のために、特に需要な事項◎、重要な事項〇、望ましい事項△

	授業科目	単位数	配当年次	履修期	授業形態	テーマと到達目標	DP1	DP2	DP3	DP4
教養科目	英語Ⅰ	2	1	前期	S	主な内容は英文法の復習と語彙力の強化である。英文法は、英語での自己表現に最小限必要な文法事項を中心に、練習問題 を解いたり、課題英作文や自由英作文に取り組んだりすること で、中学・高校とで習った文法の復習をしていく。また、学生 同のペアワークとして、コミュニケーション練習なども行う語葉については、大学生の日常生活に結びついた身近な語を多く取り上げる。	〇			
	英語Ⅱ	2	1	後期	T	テキストを用いて、分詞や受身、慣用語法、派生語、略語、 時制や疑問詞、前置詞、itの用法、時制の一致、関係詞や with の付帯状況、比較や間接話法を身につけ、やさしい本なら取り 組めるくらいの実力をつけるのが目標です。	〇			
	情報処理	2	1	前期	S	情報のデジタル化、コンピュータ開発の歴史、コンピュー テイングの要素と機構、ハードウェア、ソフトウェア、文書作 成、プレゼンテーション、ネットワーク、情報検索、コンピュー タによる問題解決、セキュリティ、情報モラル、情報システム の利用と社会問題などについて学習する。講義の内容に対応し てパソコンを使用して適宜演習を行う。講義の最終回にテキス ト内容に準じた筆記テストと Excelによる確認テスト（実技） を行い、全体のまとめとする。	〇			
	美術の見方	2	1・2・3・4	前期	T	美術作品の見方について考え、一人ひとりが美術の見方を身に付けることを目的とする。美術作品の「見方」といっても2つの考え方がある。1つ目は、美術作品について客観的に知識として学修する見方であり、2つ目は、主観的に興味を持ち疑問を投げかけてみるような見方である。前者はある程度の答えがあり、後者には答えが無い。ここでは、2つの見方を組み合わせて鑑賞を行い、美術の見方を考えることで、一人ひとりの見方を作り上げる。	〇	〇		〇
	人と心の世界	2	1・2・3・4	前期	T	人のこころの問題について学ぶために、臨床心理学の基礎的な内容について広く紹介する。まず、臨床心理学がどのように発展してきたか、その歴史と背景、そこから生みだされた主要な理論について学ぶ。さらに心理療法、パーソナリティ、心理アセスメント、カウンセリング、精神疾患の理解、臨床の現場などについても基礎的な内容を紹介する。また、人のこころの問題については、発達的視点からの理解もかかせない。発達の 原理や個人差、乳幼児期の発達に重要な愛着の問題、発達段階やそれに対応した発達課題なども学び、人のこころの問題について総合的な理解を深めることがこの講義の目的である。	◎	〇	△	◎
	哲学	2	1・2・3・4	前期	T	注目した何人かの「哲学者」の言説をたどることで、哲学というジャンルが誕生し展開してゆくさまを見てゆく。その際、古代地中海世界と初期の西欧世界を中心に、天文学・音楽を含む 数学、臨床医学、歴史、文芸といったジャンルの歴史や一般史 にも目配りをおこなう。このことにより、哲学のみならず学問 全般の由来について理解を深める。	〇			
	芸術概論	2	1・2・3・4	前期	T	日本の伝統文化を学ぶことは、同時に日本の歴史文化及び地域の歴史文化を学ぶことである。日本や中国、韓国と西洋の芸術作品や文化を比較しながら、広く芸術の意味について考察する。具体的な例を挙げながら、自分なりの芸術作品に対する理解を深めていく。	〇			
	日本国憲法	2	1・2・3・4	前期	T	法の精神、憲法の概念について学んだ後、国民主権、平和主義、基本的人権の尊重を中心に、条文の背景にある目的を理解 できるように講義を進めたい。本講義では、我々が生活していく中でどのように憲法と関わっているのかを想定しながら、現 代社会における法の生きた現実の機能を学ぶ。そして、憲法の中心的役割とされる、我々国民の権利と自由を守る基本的概念を理解してもらいたい。				〇
	国際社会学	2	1・2・3・4	前期	T	国際社会学の視点に沿って、その理論的な視点を習得するこ とを目指す。また、最新の国際問題や、身近な国境を超える社 会現象についての基礎知識と洞察力を高めることを狙いとして ている。		△		
	多文化理解	2	1・2・3・4	前期	T	近年のグローバル化社会では、異なる言語や文化を持つ人々 とのコミュニケーションの機会が増している。教育の現場や福 祉介護の現場においても、多文化主義時代に適応したコミュニ ケーション能力が求められている。本講義では、そもそも多文 化主義とは一体どういうものなのかを考察することによって、 グローバル化社会を生きるうえで必要な思考力や教養を培うこ とを目的としている。		〇		
	生命と環境	2	1・2・3・4	前期	T	人間は自然の一部であり、植物や動物ともお互いに支え合っ て生きている。人間は自分たちの都合のよいように無機物、植 物、人間以外の動物を利用することはできない。したがって、 秩序ある自然環境で人間の生命は維持される。現在、人間を取 り巻く環境は科学技術の発達の影響で大きく変化している。そ の変化によって自然環境の秩序が破壊され、人間にもその影響 が深刻である。この講義では、生命の基礎、統合された生命、 現代社会での生命に関する問題を学修する。次に、環境変化が 自然の秩序を壊している具体的事例をあげて、生命に及ぼす影響を理解し、その影響を防ぐ方法を学修する。		〇		〇
	人類生態学	2	1・2・3・4	前期	T	人類生態学は、個体群レベルで人間の生存をとらえ、その生業・食物・人口学的側面に関する包括的な研究から、ヒトの環境への適応を明らかにする学問分野と定義される。本講義は、①生態系のなかの人間、②人間の生存と健康、③人口からみた人間、④環境問題と人間の大テーマをブレークダウンして詳し く説明する。また、人間の活動に起因する今日の環境問題や人口問題の本質について理解を深める。		〇		〇
	生涯スポーツ論	2	1・2・3・4	前期	T	日本の体育・スポーツ行政は、文部科学省が管轄している。 平成 9年に保健体育審議会がまとめた答申「ライフステージ別の生涯スポーツ」には、21世紀のわが国の生涯スポーツの基本的な考え方、指針、方策が示されている。その中には、生涯スポーツをエリクソンのライフサイクル論や一般的な発育発達論及びその他の健康・スポーツ科学などを総合的に考慮し、人生 を大きく 4つに分け、それぞれのスポーツライフのあり方が提示されている。さらに、そうした個人のスポーツライフを生涯にわたるスポーツ課題に結びつけ、それを家庭・学校・地域・民間・企業・行政が一体となって組織的に支援していくことの重要性が指摘されている。本講義では、生涯スポーツの意義を学ぶことを通して実践していく必要性を学修していく		〇		〇
	生涯スポーツ実習	2	1・2・3・4	前期	S	余暇時間の増加に対応すべく、スポーツを有効に活用して、生活の質を向上させる事のできる能力を身につけることを目的 とする。体力を維持増進するための方法を含め、生涯にわたってのスポーツを楽しむことができる、基礎的技能と態度を学ぶ。				〇
	対人関係論	2	1	前期	S	心理学は一般的に「行動の科学」として認知されているが、 その研究アプローチは多岐にわたる。中でも個人心理学は、環境との相互作用を行う個体（個人）に注目して知覚や感情、思考などについて科学的に究明してきたが、社会心理学は、個人 と他者の相互作用の観点から、社会の中の個人の行動を科学的に理解しようとする学問体系であるといえる。ここで本講では、個人、集団に影響を及ぼす種々の心理的要因について具体的に取り上げ考察する	〇	〇		〇

社会福祉	2	1	後期	T	貧困、格差、不平等、安全、高齢、少子、虐待など、未曾有 の生活課題を突き付けられている現在、「社会福祉とは何か」と いう課題に突き当たる。社会福祉は社会の状況に応じて変容するものである。現在の社会の中で身近に生じている社会生活上 の問題在、人とその環境の関係の不具合だとする社会福祉の視点から捉え、私たちが人間らしく生活する（ウェルビーイング） ためにはどうすればよいのかについて考えることを目的とする。	○	○		○
地域福祉論	2	2	前期	T	地域福祉の歴史的展開および現在の地域福祉活動・事業の内容とその主体、それらを支える関連法制度を中心に学ぶ。地域 福祉を社会福祉の一つの分野として捉えるのではなく、福祉 サービス利用者の地域における自立生活を支援するための理念・技術について深く理解することが求められる。さらには、地域福祉の具体的な推進方法、地域福祉の推進に欠かせない福祉教育や地域福祉の推進主体である行政組織と民間組織それぞれの役割などについても理解することを目標としている。				○
ボランティアコーディネーター論	2	2	後期	T	大きく3つのセッションに分けて学習をする。第 1セッションはいわゆる導入部分にあたるが、ボランティア総論的な部分である。ボランティアとは何か、人はなぜボランティア活動に魅せられるのかが問われる。第 2セッションは具体的なボランティア活動の社会的な意義について学ぶ。具体的な生活の場面 でボランティア活動がどのように有効的に機能するのか幾つか 事例を紹介しながら学びを深めていく。第 3セッションが本講 義の結論的部分でもあり、メインの内容となる。ボランティア活動を効果的に進めていくにはボランティアコーディネーターの存在が不可欠である。ボランティコーディネーターはどのようにコーディネーションを行っていくのかまたボランティアコーディネーターを擁するボランティアセンターの機能はどのようなものであるかについて学びを進めていく。				○
保育の計画と評価	2	3	前期	T	保育を行う上で大切なことは、いかに子ども達の成長発達を 理解し、理解した上で適切な内容を提示するかになる。そのた めにも保育の計画を立案することは内容を考慮することと同様 に重要なことといえる。計画を立てることで、子どもの成長に 対する短・中・長期的見通しのもと、より効果的な内容の提示 が可能となる。保育における計画・実践・省察・評価・改善の 過程を理解し、保育の内容と質の向上を目指す計画の立案につ いての理解を深める。	◎	◎	◎	◎
子育て支援論	2	1	後期	T	今日の子どもを取り巻く生活環境の大きな変容の中で、家庭や地域における子育て力の低下により生じている様々な子育て 問題について学ぶとともに、各種の制度・政策による子育て支 援プランについて概説し、子育て支援の役割を担う援助者に求 められる専門性について考察する。本講を受講することにより 家庭や地域社会における子どもの育ちの保障、次世代育成支援 や子ども家庭福祉の現状や課題について学ぶとともに、各種児 童福祉施設や機関における子育て支援の実際や専門職の役割に ついても学ぶことができる。	◎	◎	◎	◎
子ども文化論	2	2	前期	T	アニメ、絵本、雑誌、おもちゃ、子供服などをはじめとする 様々な子ども文化は、情報化社会や消費社会を推進する一翼を 担いながら、子どもたちの日常生活の隅々にまで浸透している その現状をふまえ、子どもを取り巻く様々な文化的環境につい て学び、子どもの発達に深く関わる「子ども文化」の機能につ いて、また「子ども文化」の持つ教育機能の多面性についても 理解を深めたい。あわせて、消費社会と子どもの文化の視点か ら子どもの問題への関心を深め子どもという存在と子どもたち の現状についても理解を深めていきたい。	◎	◎	◎	◎
子ども家庭福祉	2	1	後期	T	1990年代以降、社会環境は激しく変化し、少子高齢社会も 進行している。子ども及びその家族の生活は大きな影響を受け 子どもにふさわしい生活が見えにくくなっている。貧困、虐待 障がい、非行、子育て不安など、現実に起こっている子どもや 家族の生活問題（福祉問題）の現状及びその対応策を学ぶとと もに、子どもにふさわしい生活（ウエルビーイング）とはどのような生活か、それを実現するために、私たちは、子どもにかかわる専門職者として何ができるかということを考えたい。	◎	◎	◎	◎
相談援助の理論と方法Ⅰ	2	3	前期	T	この授業科目は「相談援助の理論と方法」のⅠとⅡを通してソーシャルワーク（社会福祉援助技術）の基本的な知識を習得することを目的とする。Ⅰでは、相談援助とは何かを概観し、ソーシャルワークの構造や機能、相談援助における援助関係、相談援助の展開過程を主に学ぶ。これらの学修を通して、ソー シャルワークが個人や家族、集団、地域社会などへの幅広い援助方法であることを理解してほしい。また、ソーシャルワーク独自の援助を展開することを理解してほしい。		◎	◎	◎
相談援助の理論と方法Ⅱ	2	3	後期	T	「相談援助の理論と方法」Ⅱでは、Ⅰで学んだ知識を基盤に、アウトリーチや援助契約、ソーシャルワークのアセスメント、介入技術、ソーシャルワーク面接の方法、記録などについて学ぶ。これらの学修を通して、利用者の支援や援助に必要な様々 な社会資源を知り、エンパワーメントやネットワークによる援 助、ソーシャルアクションなどについても理解してほしい。また、学生は自ら社会福祉現場での具体的な事例を読むことによって、ソーシャルワークの実際を理解してほしい。		◎	◎	◎
子ども家庭支援論	2	3	後期	T	今日、家族機能の衰退や家族の病理が深刻な問題とされてい る一方で、家族はなお基本的な社会集団としての役割が期待さ れている。このような家族の現状を踏まえ、まず、家族の意義 や家族を取り巻く社会環境を概観し、今日の家族問題を見つめ さらに家庭支援の方法として子育て支援体制や家族理解の方法 家族援助の技術（ソーシャルワーク・カウンセリング・家族療法）、児童虐待への対応を学修する。また、保育所や児童福祉施設での家庭支援の実践事例についても学ぶ。		◎	◎	◎
心理学概論Ⅰ	2	1	前期	T	心理学概論Ⅰおよび心理学概論Ⅱをとおして、心理学全般、つまり心理学概論について解説する予定です。したがって、心理学 Ⅰでは、特に心理学でも最も基礎的なこと、つまり、心理学とはどのような学聞か、心理学の課題、心理学の研究法、心理学の生物学的基礎、行動の動機付け、感覚・知覚学習、記憶、知能人格等について解説します。		△		○
心理学概論Ⅱ	2	1	後期	T	心理学Ⅱでは、心理学的アセスメント（査定）、私たちは、環境をどのように捉えるのかといった問題、行動と学習の問題、 心理学の歴史、そして心理学は、どのような展開を今後見せようとしているのか、その未来について学修していくことになる		△		○
子どもの心理発達	2	1	後期	T	系統発生的な観点をふまえつつ、ヒトの特殊性を学ぶとともに、個体発生的な観点からは、胎児期から児童期に至る人間の 行動や心的機能の発生、発達、成熟過程等の変化について学修 する。また、人間のもつ諸機能の発達を相互関連的に理解し、 それぞれの発達段階における発達の遅れやつまずきなどの問題についても学修する。	◎	◎		△
家族心理学	2	4	前期	T	本講義では、まずシステムというモノの見方をおさえ、続い て、ミニューチンの家族構造療法および MRIの家族相互影響ア プローチをとりあげる。家族構造療法は家族療法のスタンダードであり、このアプローチを知ることで、家族をどのように査 定し、どのように関わればよいか、理解することができる。 MRIのアプローチはポスト構造主義に位置し、これを知ることにより家族療法からブリーフセラピーへの流れを把握すること ができる。	○	○		○
コミュニティ心理学	2	4	後期	T	地域生活者の心理学的問題に関する援助は、スクールカウンセラー派遣制度のように、学校など特定のコミュニティに心理専門職が出向く形での援助が増加しつつある。このような支援形態のもとでは、外部に所属する心理専門職とコミュニティに 所属する人々との関係のあり方や、コミュニティの特徴、ある いは支援のためのリソースにも十分配慮し、コミュニティをエンパワーメントする役割を果たす介入などが必要となる。こうした実践的かつ複雑な支援に必要な知識と技法を、コミュニティ心理学の視点から検討してゆく。	○	○		○
障害者・障害児心理学	2	3	前期	T	さまざまな障害について、その特性や制約の種類、年齢や領域に応じた教育支援や福祉援助の方法について理解を深め、個々の立場にたった支援を実践するための基盤作りとして以下の内容を中心に学修する。まず、「乳幼児から成人までの支援 システム」として、療育・教育支援・福祉支援のシステムや具 体的な方法を学ぶ。 次に、「さまざまな制約への理解と支援」 について、各障害やその特性・制約に応じた理解と支援の詳細 を学び、実際に支援者としてどのようなことができるのかを考える。 そして、「教育や援助のためのアラカルト」として、さまざまな教育や福祉現場において共通に求められる理解や支援方法、支援のあり方について考える	◎	△	○	△

カウンセリング	2	4	前期	T	臨床心理学的援助技法としてのカウンセリングについて、その背景理論やカウンセリングの実際を学ぶ。はじめにカウンセ リング心理学の歴史的背景や経過を概観し、現代日本における カウンセリング実践の諸課題を解説する。次に一般的なカウン セリングプロセスと、カウンセリングにおいて重視すべき初回 面接、および見立てについて詳しく解説する。さらに個別カウ ンセリング以外の心理援助技法についても解説する。講義中に 何度かカウンセリング事例も扱うが、学科の特徴を考慮し発達 期（乳幼児～青年期 ）の子どもに関する親面接事例や遊戯面接 等を導入する。	○	○	◎	○
保育の心理学	2	2	前期	T	保育実践における子どもの発達理解の意義について学ぶとともに発達に関わる心理学の基礎を習得し、子どもへの理解を深 める。また、子どもの発達に関わる他者との関わり、社会的相互作用等についても理解する。さらに、生涯発達の観点から発達のプロセスや初期経験の重要性について理解し、保育実践と の関わりについて考察する。	◎	◎		○
子ども家庭支援の心理学	1	2	後期	T	保育の心理学Iの学びをさらに深化させ、生活や遊びを通して学ぶ子どもの経験や学習の過程、および子どもを理解するた めの多様な視点について理解する。また、発達課題や主体性の形成、就学への支援等、保育実践における具体的な発達援助についても学ぶ。	○	◎	○	△
子どもの理解と援助	1	2	後期	S	子どもの実態に応じた心身の発達と子どもへの関わりについての理解を深めるとともに、初期経験の重要性、発達課題などについて学習する。それらとの関連の中で、家庭関係、子育て家庭の課題、子どもの心の健康について学ぶ。				
臨床心理学概論	2	3	後期	T	臨床心理学とは、人間の心理・行動面の諸障害についての診断、治療、それに予防法にかかわる研究と実践の分野である。したがって、この授業では主として心理的な諸障害にどのよう なものがあるのか、その原因としてはどのようなことが関係するのかといったことの解説とその障害に関する診断や心理判定の方法として用いられる心理面接、行動観察心理検査法につ いて解説する。さらに諸障害に対してどのような心理的治療や対処法が用いられるのか、それとともに今日の主要な心理療法 について解説する。さらには不適応行動や種々の障害に対する 予防法、ないしは心身のより健康の増進を図るための臨床心理学的な諸活動等について今日どのような手法がとられているのかを紹介する。	◎		△	○
社会的養護Ⅰ	2	3	前期	T	児童養護は児童本来の家庭における養護と児童福祉施設や機関などによる社会的養護の連携協力によって初めて全うされる このことを踏まえて、社会的養護の中でも特に児童福祉施設による児童養護の考え方及びその現状を詳細に学ぶとともに、養護上の基本原理とその実践について考察する。本講を受講することにより、児童の社会的養護における自立支援の実際について学び、家庭養護との対比の中で里親養護や施設養護における児童の権利保障や最善の利益について、その理念と実践を学ぶことができる。	○	○		○
社会的養護Ⅱ	1	3	後期	S	社会的養護の基礎的内容について、理解するとともに、施設養護及び家庭養護の実際、計画・記録・自己評価の実際、相談援助の方法とその実践、子どもの虐待防止と家庭支援、今後の課題と将来展望塔について学ぶ。	◎	◎	◎	◎
教育心理学（初等教育）	2	2	前期	T	現代の教育的課題を解決するために必要な教育心理学の原理や方法を、児童生徒支援に役立つ臨床心理学的視点も加え論じてゆく。具体的には、授業場面をはじめとする学校生活において、生徒個人・生徒集団・生徒と教師との関係における教育心理学的課題、教師による生徒の学修指導および教育評価における教育心理学的課題を題材として教授する。また、生徒が学校 で示す様々な心理学的問題の理解とその対応について、教育臨床心理学の視点を交え論じると共に、今日的課題である特別支援教育と教育心理学との関わりについても解説をおこなう。	◎	◎		○
保育原理Ⅰ	2	1	前期	T	保育の基礎を構築することから、自らの保育観、子ども観、 保育士観、保護者観が磨かれていく。そのためにも、概念・理 念を矢ることから始まり、歴史的思想を理解することで、今の保育思想を次につなぐものへ変える力をつける。さらに、保育 現場において求められているものを知り、理解することで家族援助や子育て支援の重要性を理解する。子ども達と関わる上で必要な実践的知識を理解し、自ら応用する力を身に付けるため毎回の講義の中で自らの保育に対する基礎作りを求める。	◎	◎		○
保育原理Ⅱ	2	1	後期	T	保育園・幼稚園における保育者の役目や求められているものをしっかり理解することが大切となる。そのためにも理論に基づいた保育者の専門性に関する知識・基礎を理解する必要がある。そうすることで、個性のある魅力ある保育者、自分が保育者としてできることを自ら見つけだすことができるようになる ただ単なる知識の詰め込みではなく、自らが考える講義となるよう、子ども・保護者・社会にとっての保育者とは何かという投げかけに対する答えを見つけ出すことを求める。	○	◎		○
保育原理Ⅲ	2	2	前期	T	日本における保育の中心となす保育所保育指針の理解、さら にはその理解をベースとし、今後の保育観を作り上げる内容と なる。保育の現場では、同じ日・同じ瞬間は二度とない。その状況に対応するためには、いかに保育者としての基盤を作り上 げているかが鍵となる、そのためにも保育者としての基盤・基 礎知識となる保育所保育指針は必要不可欠な内容となることを 理解して臨んでほしい。	◎		○	△
子どもの保健	2	1	前期	T	子どもの保健とは、子どもたちの日常生活の中から生まれ、実践されるものであり、心と身体の健康を維持し、増進することを目的とした積極的な実践活動である。この科目では、保育 現場という、養護と教育を同時に行う場での健康と保健の意義 を踏まえた上で、子どもの身体発育、生理、運動・精神機能の発達、さらには心身の問題だけではなく、栄養・生活リズム・ 母子関係・環境・社会制度についても学修する。また、子どもの病気の特徴や躍りやすい疾患、子どもの事故予防や遺伝につ いても学修し、理解を深める。成長発達が著しい乳幼児期にお ける、病気の意味や家族の関わり方について学び、保育現場と家庭との連携について考察する。	○	△		△
子どもの健康と安全	1	2	前期	S	保育施設における子どもの健康及び安全は子どもの生命保持と健やかな生活の基本である。各感染症、アレルギー、保育施設における事故防止や災害対策など、広い範囲にわたり各種ガイドラインをふまえ、それぞれの内容の理解と実践を演習を中心として学修する。	◎	◎	◎	◎
子どもの健康と安全	1	2	前期	S	「子どもの保健IIJでは、演習形式を用いて学修する。「子ど もの保健I」では子どもの健康の保持増進、心身の発育・発達 子ども達の安全で健やかな生活についての理論を学んだ。それらの知識を実際の保育現場で実践できることを目標とし、演習を重ね習得する。具体的には、子どもに関わる際の“抱っこ” “おむつ替え”“沐浴”などの一般的な養護技術や、子どもの発育・発達の評価、子どもの健康状態の観察方法、病気やけがの 救急時の看護、保育現場における保健活動および事故予防、危機管理の方法について学修する。さらに、広く子どもの保健を 考えるうえで、心の健康と問題の対応法についても深く学び、「心と体」という広い視点を持って「子どもの保健」を捉えていく。また、保護者に向けて子どもの保健的な知識と技術を伝 えていくことや、保護者の精神的サポートの役割も求められて いる。これらの事も演習を通し習得していく。そして、地域に おける保健活動と保育現場の関連性を学び、関係諸機関との連 携方法を学修する。		△	◎	△
子どもの食と栄養Ⅰ	1	2	前期	T	現在の子どもの食事の現状、および栄養問題を知り、小児期からの食の大切さを理解するため各栄養素のはたらき、消化、 吸収、代謝の基礎的知識を身につける。また、栄養とバランス のとれた食事をするために食品の基礎知識、食品の組み合わせ 方を学び、食事バランスガイドを参考に食事摂取基準に基づいて献立を作成してみる。と同時に安全で豊かな食生活を営むうえで市販されている食品の表示、および機能についても理解す る。		○		△

子どもの食と栄養Ⅱ	1	2	後期	S	小児期各期および障害のある子どもの成長段階に応じた栄養 の重要性と特徴を理解し、食物アレルギーをはじめ、食生活上の問題点、改善策など学ぶ。食環境も含めて環境の変化に伴い 小児の健康をめぐる問題が大きくクローズアップされてきている。社会的に注目されている生活習慣病も子どもの時期にすで に下地があるといわれている。それらを把握し、子どもたちに 食を通しての健康づくり、人間関係とマナー、食に対しての興味を持たせ、生活習慣病予防の面からも、食育の重要性を保育 の中で実践していく。その一環として集団給食を通して子どもに食事指導を行うため、各年齢に応じた媒体なども活用しながら取り組んでいく。	△	△	○	△
乳児保育Ⅰ	2	2	前期	T	保育所保育指針において保育所の保育は養護と教育を一体的 に進めるものとして定義されています。今後、幼児教育の施設 は幼稚園と保育所の双方が該当することになりました。児童福祉法も保育所保育を支える方向で改正され、さらに次世代育成 支援計画の策定が地域に義務づけられる中で保育所の児童福祉に占める位置が大きなものとなりました。保育士の業務として子どもを保育することと共に、家庭への支援が含められたこと も大きな意味があり、それが保育所保育指針での保護者視点の 詳細化につながり、並行して、幼稚園教育要領でも保護者との連携や子育て支援が明確に記されました。子育て支援が幼保双方に大きな課題となっているのです。 以上のことから、保育士の仕事は広がりつつ、さらなる質の高さを求められるようになっています。	◎	◎	◎	◎
乳児保育Ⅱ	1	2	後期	S	人間は、一生涯、発達し続ける。そのなかで、とくに乳幼児期は、一生のうちで最も発達が著しい時期だといわれている。 子どもは、個人差はあるものの、みずから成長していく力をもち、さまざまな可能性を秘めているのである。子どもの発達理解をする。	◎	◎	◎	◎
乳児保育Ⅲ	1	3	前期	T	日本の風土や子育て文化、これまでの研究の成果を踏まえ、乳児が育つ過程で保育者の豊かな人間性、徹密な観察力と想像力、そして不断の努力に支えられた確かな判断力で一人ひとり の乳児に向き合い、乳児との相互作用の中で営まれていることをまず学び、乳児が育つ姿の裏側にある育ちを支える保育者の有り様を学ぶ。乳児理解にとどまらず、乳児を育てている家庭との相互理解や連携を取りながら実践者として働く力、自分の実践を内省する力、そして自分自身を育てる力が備わること。	◎	◎	◎	◎
障害児保育Ⅰ	1	1	後期	S	現在の障害児における保育の形態、受け入れの現状から障害 児保育の意義や問題点を考える。また、障害児を抱える保護者への支援、地域社会における関係機関等、社会資源との連携の必要性と保育士の役割を知る。障害別の特性、原因などを正し く理解した上で、保育現場で想定される問題にどのような関わりが必要となるかなどについて学修する。	◎	○	△	○
障害児保育Ⅱ	1	2	前期	T	最近では、さまざまな障害を抱える子どもたちが、幼稚園や保育所において地域の子どもたち一緒に生活をする「統合保育」 が進んでいる。地域の中でともに生活することは、専門機関に よる療育・訓練とは違った意味で障害の改善につながることは明らかであり、その支援が「保育」の任務でもある。また、障害を持つ子どもたちとともに保育を受けることが、障害を持たない子どもたちの発達にも大きな影響を与えている。本講義は 次の4つの項目を中心に考えている。1.障害児の概念と障害の種別、心身の発達と障害の関係について理解する。2.「統合 保育」の仕組みと内容について理解する。3.障害の種別と個別指導計画とケースカンファレンスについて実践的に学ぶ。4. 障害児保育に関わる上で理解をしておく必要性のある基本的な訓練・指導法について実践的に学ぶ。	○	○	◎	○
障害児保育Ⅲ	1	2	後期	T	子どもの発達の視点から統合保育に焦点をあて、保育所、幼 稚園における統合保育の意義と目的、保育士の果たすべき役割 について再確認する。また今日の子育て事情を反映して、保護 者支援が重要な課題となっていることから、保育士としての支 援のあり方を考える。保護者・家族を支援するために必要な社 会資源、関係機関との連携・協働について理解する。さらに障 害児を取り巻く医療・福祉・保健機関との連携と障害児保育か らの出口である就学支援について学修する。	○	○	◎	△
社会的養護内容	1	3	後期	S	養護内容の実践の場である児童福祉施設のうち、本講では特に居住型施設を中心に、児童養護の体系や各種児童福祉施設の概要、施設生活の内容、各種専門職の役割等について、文献資 料ならびにビデオ・DvD等を通じて学ぶ。また、アドミッ ションケア、インケア、リービングケア、アフターケアの各段 階での養護内容の実践についても事例を通じて学ぶ。本講を受講することにより、各種児童福祉施設における子どもたちの日常生活養護の実際を理解し、施設養護における子どもの心身の成長発達援助の方法を学ぶことができる。また、施設の児童指導員・保育士等、いわゆる児童ケアワーカーに必要な専門知識技術、倫理等を学ぶこ	◎		○	○
保育内容指導(健康)	1	2	前期	T	生涯にわたる心身の健康の基礎を培う重要な幼児期における運動、生活習慣は、体格、運動能力の発達はもとより、心身の病気に対する抵抗力などの防衛体力、さらには、安全という視 点からも大きな影響を及ぼす。こうした健康という保育内容の歴史的・概括的枠組みから、その具体的留意点までを理解することを目的とする。	○	○	◎	◎
保育内容指導(人間関係)	1	2	後期	S	保育内容の領域「人間関係」について、保育所保育指針、幼稚園教育要領、認定こども園教育・保育要領を基に理解を深めるとともに、話し合いや触れ合い遊びの中で乳幼児期の発達に 添ったかかわり方、乳幼児を取り巻く人間関係について考察する。そして保育の実践例に触れながら、保育内容「人間関係」 について考察する。その中で学生自身が他者とのかかわりを通して自己をみつめ、保育者として求められる人とかかわる力について課題を持つ。	◎	○	○	◎
保育内容指導(環境)	1	2	後期	T	幼児の自然認識、時間・空間認識を刺激・促進するには、何よりも幼児と一緒に野外に出て、自然を感じさせ、物に触れさせるなどの活動が必要である。幼児を取り巻く環境の中で、身近な動物・植物の名前はそれらを認識するためには大切である「これ何」、「どうして空は青いの」、「鳥の声は聞こえる」などの質問に、わかり易く幼児に答え、処理させる。環境の原体験が極めて大切で、幼児を取り巻く環境にどのように触れさせるか、その内容・方法を具体的に指導する。		○		○
保育内容指導(言葉)	1	2	後期	T	保育者は、子どもに日常生活の中で言葉への関心や興味を持たせ、喜んで話したり聞いたりする態度や、言葉に対する感覚を獲得させなければならない。そのために保育者はどのように援助し、環境を整えればよいのかを理解する必要がある。言葉は人間の持つ最も基本的な能力の一つであり、人類の重要なコミュニケーションの手段でもある。ここでは、まず幼稚園教育要領の「言葉」の領域の概念を理解する。 次に、言葉の機能を 学び、子どもが発達段階において言葉をどのように獲得してい くのかについて学習する。そして、幼稚園教育における言葉の 教育のねらいを理解し、生活体験を通しての言葉の教育の重要 性について考察する。 その上で、子どもが「言葉を聞くこと」「言葉で表現すること」「言葉で考えること」ができる力を育てるために、保育者がどのように援助すべきかを考察する。さらに、ひとととのかかわりや文化財とのかかわりの中で、子どもの言葉が発達することを学び、言葉と環境について理解を深める最後に、言語の障害や母親指導など、言葉の周辺の問題もとり上げ、言葉から国語教育への展望を考察する。	○	△	◎	◎
保育内容指導(表現)	1	2	後期	S	子どもが遊びを中心とした表現活動を通して、豊かな感性や表現力を養い、創造性を豊かにしていくことができるように保 育者は関わることが求められる。このことは、子どもの生きる力を育むことでもある。子どもの表現を育むことができる保育者であるためには、子どもの表現が理解できること、子どもの創造性を引き出す援助と指導ができることが必要である。この授業では、子どもの造形表現と身体表現を取り上げる。	○	○	◎	◎
保育内容指導(保育内容総論)	1	2	前期	S	保育内容において様々な知識・経験を積む中で、その総合的理解を求める内容となる。そのためにも子どもの発達段階をしっかり理解することにまず第一の視点を置く。理解した発達段階に子どもたちを当てはめるのではなく、日の前の子どもた ちがどの発達段階にあり、専門的知識をいかにして実際の保育現場に盛り込んでいくのか、発達段階にあった計画とはどういうものなのか、などのより実践的内容を認識し、得た知識を活かす方法を学ぶ。	◎		○	△

専門教育科目	基礎技能(音楽A)	1	1	後期	S	保育者の奏でる音や音楽は子どもを育む環境となる。子ども たちに伝えたい歌を正確に、そして歌に込められているメッ セージを表情豊かに伝えることができるように歌唱法を学ぶ。 さらに効果的な伴奏ができるよう、ピアノの基本的な奏法を修 得する。ピアノのための練習曲や、子どもの歌を教材として、 旋律の歌わせ方、基本的な和声進行、リズムの効果などを理解 しながら、より豊かな歌心を引き出せる演奏を目指す。弾き歌 いの技術も修得する。また、子どもが楽しく音楽活動を展開で きるように、簡易楽器の取り扱い方も学ぶ。歌は、旋律と伴奏 で完結している。伴奏は、歌の内容(情景や心の動きなど)の表現を担っている。従って、伴奏はその歌に相応しい伴奏を 持っている。ところが、実際には、子どもの歌集には多くの簡易伴奏の版が出回っており、その歌本来の姿が感じ取れなく なっている。本講座では、この問題解決のために、オリジナル版を使用して、作者の音楽意図を感じ取ることにしている。	◎		○	
	基礎技能(音楽B)	1	2	前期	T	基礎技能(音楽A)で培ったソルフェージュ力、ピアノ演奏力、歌唱力をさらに高め、現場で必須となる弾き歌いのレパー トリーを広げていく。子どもの生活や遊びから音楽表現へと結びつくよう、子どもの目線から捉えられる自然の様子や四季の移り変わり、周りの生き物、食べ物、友達との遊び、行事など 子どもの生活を歌っている歌を題材に取り上げる。そして、歌詞を考察することにより、表現遊びや劇遊びへの発展の可能性等も探る。	○		◎	
	基礎技能(図画工作)	1	1	前期	S	子どもの造形活動を援助・指導するためには、子どもの発達段階の理解や発達段階に適した題材設定と準備はもちろんだが 保育者自身の基本的な造形技能として素材特性の理解や加工・ 技法に習熟している必要がある。この授業では演習による課題 製作を通して、様々な素材の特性や加工方法の理解と技法など保育者として必要な造形表現の基礎技能を養うことをめざす。	○	△	◎	◎
	基礎技能(小児体育)	1	1	後期	T	児童の体力・運動能力は総じて低下の傾向を示しているといわれている。こうした現状の原因として、幼児期・児童期にお ける運動遊びの減少が指摘されている。そこで、体力・運動能 力の基礎を培う幼児期・児童期の運動の質的向上をテーマとし子どもの発達段階に即した運動遊びを理解することを目的とし多くの運動遊びをテキストを通じて学び、その実施法と指導のポイントを学修する。	○	◎	○	◎
	基礎技能Ⅱ(音楽)	1	2	後期	S	既成曲の演奏だけでなく、コードネームによる伴奏や、子ど もの声域に合わせるために必要な移調奏を学ぶ。その発展応用 としてさまざまな音楽活動における音楽の用い方なども含む。 音楽を介して様々な子どもに対応できるように、即興的な伴奏 の仕方や合奏のアレンジの実践例を検討する。このように楽譜 だけにとらわれない幅広い音楽活動を展開できる力を身に付け 子どもの自由な音楽表現を認められる保育士・教員としての力 量を育てていきたい。	○		◎	
	基礎技能Ⅱ(図画工作)	1	1	後期	S	子どもの造形活動を援助・指導するためには、子どもの発達 段階の理解や発達段階に適した題材設定と準備はもちろんだが 保育者自身の基本的な造形技能として素材特性の理解や加工・ 技法に習熟している必要がある。この授業では演習による課題 製作を通して、様々な素材の特性や加工方法の理解と技法など 保育者として必要な造形表現の基礎技能を養うことをめざす。	○	△	◎	◎
	保育実習指導ⅠA	1	3	前期	S	保育士養成課程において修得した教科全体の知識・技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用能力を養うことを目的とする。そのためにも、保育所実習の意義・目的・内容についての理解を深め、各自の実習目的・課題を明確にする。そして 実習記録や指導案の書き方を学び、具体的な実習準備を行う。 保育者としての職業倫理、特に個人のプライバシーの保護と守秘義務、子どもの人権の尊重について理解し、実習後は、実習 総括・評価を行い、新たな学修目標を明確にする。	○	◎		△
	保育実習指導ⅠB	1	3	後期	S	福祉施設実習の意義や目的を理解する。さらに実習施設の種類や概要、各施設の役割や機能、養護内容などを学ぶ。またそれぞれの施設の現状についてもふれる。施設を利用する児童や 大人がかかえる問題や障害について学び、利用者の背景にある 問題(児童虐待や児童養護、障害児・者問題など)についても理解する。実際の実習において実習生が施設職員から学んでほ しいこと(保育者の役割、職員の職種や役割など)や実習生が 施設利用児・者の日常生活から学んでほしいこと(利用者の思 いや心理状態や健康状態、家族との関係、人間関係など)につ いてもふれる。	○	△	○	◎
	保育実習指導Ⅱ	1	3	前期	S	保育所の保育内容の各領域とその全体を実践に照らして理解 し、保育課程のもと指導計画の体系と立案の方法などを実践に 即して理解する。そのために、総合的に実践する応用能力を養 い、子どもの集団を全体的にとらえる視点と、ひとりひとりの 子どもの発達の方向付けを具体的に学習する。実際に自身が行 う部分・全日などの指導実習の際に考慮しなければならない点や、子どもの発達成長に合った内容を立案する重要性について 深く理解する。実習後においては、反省をもとにさらなる自己 の課題追求を行う。		○		△
	保育実習指導Ⅲ	1	4	前期	S	利用児・者の発達段階・生活課題・ニーズ、生育暦、入所経 緯、障害等の理解ができるよう学修をすすめ、それらの情報を もとに個別的な支援計画の立案や実践、評価ができるようにす る。そこから利用児・者の個々のニーズや課題に対応するサー ビスや社会資源を明らかにし、それらの連携によるソーシャル サポートシステムについても学修する。保育実習Ⅲは保育実習 Ⅰを深め、総仕上げの意味を持つことから、福祉の現場に触れ ることで福祉観や援助観を深めていけるよう、ノーマライゼー ションなどの理念の再考や利用児・者の人権尊重、守秘義務な どの福祉倫理の重要性についても学び、今後の課題(福祉の現場および実習生個人の課題)を見い出していけるよう指導した し。	○	△	○	◎
	保育実習ⅠA	2	3	通年	J	保育現場において、今までに得た知識や技術が、いかに子ど も達へと実践され、機能しているかを体験する。また、実際に子どもと触れ合うことにより、より深く子どもの姿を理解、子どもと保育士との関わりを様々な視点から考察する。保育所における実際の保育士の役割を正しく理解し、保育所・家庭・地域社会の関係性の中における保育士の役割を考察する。今までに得た知識を知識として留めておくのではなく、いかに実践で役立たせるかという視点で取り組むことを求める。	◎	◎	◎	◎
	保育実習ⅠB	2	3	通年	J	児童福祉施設等の生活や一日の流れを理解する。利用児・者 の多面的理解(発達段階・生活課題・ニーズなどの把握)に努 め、さらに集団生活ならではの場面に注目し、個々の状態に応 じた援助やかかわりができるようにする。また記録にも反映さ せる。各施設の目標に沿った養護活動の実際を経験し、子ども の心身の状態に応じた対応や生活環境を守ることを学ぶ。その 中から保育士としての職務内容、役割分担や連携についての理 解を深める。また、施設の役割や機能、目標が実際にどのよう に反映され、展開されているかを学ぶ。	◎	◎	◎	◎
	保育実習Ⅱ	2	3	通年	J	保育実習Ⅰで得た保育現場での知識や経験を理解し、それら を基に自らの特色を生かした保育とは何かということを、自ら 構築していく。その上でも、指導案は勿論のこと日々の保育の中でも“保育の個性”を理解し、掴み取っていく。保育現場を 実際に触れ、実践において必要な日々の心構え、子どもと関わ る上で重要となる保育理論、そして体調管理の重要性を感じる そして、保育実践におけるニーズに対しての理解力・対応力に ついて考える。毎日の保育場面から、自己の持つ知識・経験・ 技術における課題を明確にし、自己解決力を身に付ける。	◎	◎	◎	◎
	保育実習Ⅲ	2	4	通年	J	利用児・者の特性(発達段階・生活課題・ニーズ、生育暦、 入所経緯、障害)を把握した上で課題を考察し、個別の支援計 画を立案し、実践できるようにする。また、利用児・者と信頼関係を深める態度を身につけ、さらに彼らの権利擁護を進める 取り組みを学ぶ。そのためにも異なるニーズをもつ利用児・者 に対応するサービスやサポート体制(保護者支援、家庭支援な ど)についても具体的に学ぶ。施設の機能や役割を深く理解し 保育士の多様な業務を理解する中で、職業倫理を守ることの大切さを学ぶ。また職員間や他職種との連携についても学ぶ。	△	◎	◎	◎
	子育て支援	1	3	後期	S	保護者に対する保育の指導(相談、助言、情報提供、行動見本の提示等)の概要を理解し、保育士の行う子育て支援について具体的な事例を通して実践的に理解する。多様な子育てニーズ、特別な配慮を必要とする子どもや家庭、虐待のある家庭などの事例を検討しその理解を深め、そこでの支援の在り方を考察する。また社会資源との連携、協働の必要性を理解する。	◎	◎	◎	◎

子どもの国語	2	2	前期	T	敬語・文法・漢字・文章表現など、国語の基礎的知識を身に付けるとともに、伝統的な言語文化であることわざ・慣用句などを学び、伝統的な言語文化について理解を深める。さらに、このような日本語力の獲得によって、子どもへの言葉かけ、あるいは保護者との話し方など、会話（コミュニケーション）能力の育成を図る。また、書写に関する理解を深め、幼稚園および 小学校教員として必要な国語の基礎的知識を身に付ける。	○		○	○
子どもの社会	2	2	前期	T	小学校社会科の授業が自ら計画でき、児童を指導できるだけ の力が必要となる。そのため社会科の授業構成に伴う基礎的理 論や指導方法・指導技術などについて学ぶとともに、平成20年 度に改訂された「小学校学習指導要領」および「小学校学習指 導要領解説 社会編」についても取り扱う。 本講義では、小学 校社会科教育の意義や課題、歴史、目標、学力、内容と方法、 学習指導に至るまで原則的なことがら、基礎的・教養的なもの を整理し、小学校社会科の授業づくりの具体的な方法、学習指 導ができる実践的能力を養いたい。	○		○	○
子どもの算数	2	2	後期	S	算数・数学の基礎的・基本的内容である加法、減法、乗法、除法、小数、分数、比と比例、量と測定、図形等について学習し ます。次に、自分で考えたり説明したりすることを学修します また、算数の問題を解決するに当たっては、数学的な考えを基 にして問題解決の方法を考察します。本講義では具体的には、 数について、四則演算について、量について、図形について、 図形と量について数量関係について、算数・数学教育について考察します。	○	○	○	○
子どもの理科	2	2	前期	S	学習指導要領の説明から始めて、身近なテーマを取り入れ、 子どもに分かりやすく理科の内容を教えることができるように 理科の内容を 4つの分野（物理、化学、生物、地学）で整理し て各分野の全体像を理解できるようにする。特に、学習指導要 領に示されている学年で身につけなくてはならない問題解決能 力を意識しながら実験・観察を行い、問題解決型の理科授業が できるように学修する。演習を入れ、実験器具の扱い方も身に つけさせる。	○	○	○	○
子どもの生活	2	2	前期	T	「生活科」は、児童の直接的、具体的な活動や体験を通して、児童に自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもたせ、 自分自身や自分の生活について考えさせ、また、生活上必要な習慣や技能を身に付けさせて、自立への基礎を養うことを目標 とする教科である。本講義では、①これまでに明らかになった 生活科の課題、②「学習指導要領」の内容、③児童の学習の仕方を尊重した、児童を中心とする学習支援の意義やそれを実践するために必要な具体的な教育方法及び教育指導計画などにつ いて学ぶ。	○		○	○
子どもの音楽	2	1	前期	T	子どもの音楽表現は、子どもが自分の身体を通して周りの世界をつかんでして過程におして芽生えてる。音楽表現をするには様々な能力が必要であるため、音楽との関わりは子どもの成長にとって大変大きな役割を果たす。そこで、保育者として 音の性質や音楽の要素についての理解を深め、それが子どもの遊びの中でどのように展開されていく可能性があるのか、そしてその遊びがどのように音楽的能力を育んでいくのかを学び、子どもの発達に合った活動を検討する。	○		○	○
子どもの図画工作	2	1	前期	T	子どもたちは遊びを通して自分をたしかめ、想像力を耕し世界を理解していきます。幼児期に開花する造形的な想像力は遊ぶ力の豊かさそのもので、造形表現は子どもの根源的な力を育みます。この授業では造形表現について「何を」「なぜ」「どの ように」学ぶのかを学修し、幼児期の造形教育に求められている役割や課題を知り、保育現場において実践していくべき方向 を考えます。	○		○	○
子どもの家庭	2	2	前期	T	家庭科教育は、快適な家庭生活を営むために達成しなければならない生活課題を達成するための能力を学校教育の中で育成 するための重要な担い手である。生活課題の内容や解決手段が 複雑化・多様化する中で、自分の意思と判断力に基づいた行動 ができる実践力を持った生活主体者を育成することが家庭科に 課せられた役割である。また、家庭生活を中心とした人間生活 の自然科学的社会科学的認識や生活技術の修得とともに、生活 課題を解決するいわゆる問題解決能力の習得をめざし、体験的な学修を通して生活を想像発展させることが重要課題として挙げられる。そのため、この講座では、子どもたちが生活者として自立する上で必要な生活技術と知識について、家族・家庭生活、食生活、衣生活、住生活、消費生活・環境の各分野の内容 について理解を深める。また、子どもを取り巻く社会の変化に 対応した共に生きる地域づくりについて考えるとともに、生活 の質の向上をめざし、子どもたちの生活者としての自立能力を育てるために、楽しみながらおこなうことのできる実践的体験 学修のあり方について学ぶ。	○		○	○
子どもの体育	2	2	前期	S	本講義では、体育科の目的・目標を歴史的変遷から概観し、 現在求められている体力・運動能力、および健康観を理解する ことから、実際の授業で取り扱われる内容とその教授法、保健 領域への取り扱い、評価の問題についての理解を目的とする。	○		○	○
子どもの英語	2	2	後期	S	・歌やチャンツ、ゲーム、簡単な英会話などの子どもの英語を実際に体験し、子どもの英語について理解を深めることできる。 ・指導者として子どもへの声かけの英語表現を学び、子どもを指導していく上で実際に活用することができる。 ・子どもの英語についての理解を深め、教育者としての指導観を持つことができる。	○		○	○
保育指導法（健康）	2	2	前期	T	児童期の体力・運動能力は総じて低下の傾向にあると言われている。これは児童期の体力・運動能力の基礎となる幼児期の 運動機会の減少が理由の 1つと考えられる。そこで、本講義は 幼稚園教諭を志望する者を対象とし、生涯を通じて健康で安全 な生活を営む基盤としての幼児期の健康への配慮について理解することを目的とする。		○	◎	○
保育指導法（人間関係）	2	3	前期	T	この授業では、人間にとっての人間関係の意義や子どもを取り巻く環境について、学生自身の人間関係や生育環境を振り返りながら、学修を進めてほしい。とりわけ乳幼児期に、子どもが大人や同胞との人間関係を通して、心身共に成長・発達していくことを理解することが重要である。また、子どもの人間関係に見合った遊び支援や教育指導、仲間との関係形成、あるいは不適応行動に対する援助のあり方について、実践的な事例などを通して考察することも重要である。		○	◎	○
保育指導法（環境）	2	3	後期	T	「環境」の指導目標は次のとおりである。①身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で、さまざまな事象に興味や関心を持た せる。②身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、 考えたりし、それを生活に取り入れさせる。③身近な事象を見 たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにさせる。		○	◎	○
保育指導法（言葉）	2	2	後期	T	「保育内容（言葉 ）」での学修を基礎とし、子どもの言葉の特徴や発達をさらに詳しく学ぶ。そして、言葉が育つ ために集団 が果たす役割や子どもの言葉を育てる保育者の指導方法を、事 例から具体的に検討する。子どもの言葉を育てるために必要な教材や保育技術への理解を深め、実践的な指導力を身につける さらに、言葉の障害や遅れなどの問題を取り上げ、子どもや親への対応や指導について考察する。		○	◎	○
保育指導法（表現）	2	2	前期	T	（造形表現） 造形表現では、理論とともに、幼児の発達に即した題材とその指導法、評価のしかたを学び、保育者としてのあり方や役割を身につけることを到達目標とする。 （身体表現） 身体表現では、幼児の身体的発達や運動能力発達の理解をはじめ、より豊かな身体表現を促すための動きの質的評価の理論とその方法を身につけることを到達目標とする。		○	◎	○
保育指導法（保育内容総論）	2	4	前期	T	日々の保育を行う中で、常にその理論と方法が大切となる。しかし、その理論と方法はどのように考えられ、また実践されるのか。この疑問に対する自らの答えこそ、今の保育者にとって求められているものだと考える。子どもにとって充実した生 活とは何かを考える必要がある。そのためにも、日々の生活の 中で繰り広げられる活動やそれを取り巻く環境に対して、自らの理論を構築する必要がある。保育者として大切な方法論を構築することを求める。		○	◎	○
初等教科教育法（国語）	2	2	後期	T	国語科の授業を計画し指導するために、各領域について理解するとともに、国語科授業の構成理論、指導方法、指導技術に ついて学び、学習指導計画作成の力及び授業における実践的指 導力を養う。さらに、書写においては、正しい姿勢や執筆法、 基本的な指導過程、評価及び作品処理の方法、教材教具の創意工夫等、小学校における書写指導に必要な力を身に付ける			◎	○

初等教科教育法（社会）	2	3	後期	T	小学校教師を目指す者を対象に児童に社会科指導ができる実践的力量の養成をはかることを目的としており、受講生は高い専門性を備えた教員を目指してもらいたい。小学校教員が求められる専門性とは、児童の人格を育てることが職務の中心をなす。すなわち育てたい子ども像、人格像があり、その基本的な枠組みの中にある諸教科、道徳、特別活動などの指導にあたることとなる。小学校教育の理念と子ども観の一体化を図り、総合化を目指す児童の人格淘汰に、小学校教育の機能と教員の教育的営みの基本がある。教育的営みの中の一つに日々の学習指導（授業）がある。学習指導を展開しつつ、授業内容の考察や省察も求められる。本講義では、小学校社会科授業の指導を行うための専門性を育成したい。			◎	○
初等教科教育法（算数）	2	3	後期	T	「教師は授業で勝負する。」と言われているように、教師の仕事の中核は授業です。現在、教師には実践的指導力が求められています。算数の指導においては、算数科の内容の分析とその指導の背景、子どもが魅力をもつための教材教具の活用・開発等についての研究が大切です。ここでは、具体的な指導事例を 通して算数科指導法の基礎的事項を習得し、実践的指導力養成 の一助とします。そのためには、まず、算数科教育における指 導理論や教材・教具論など授業を構成するための基礎的事項を習得します。次に、学校現場での教材・教具等の活用などの具体的な指導事例を通して、学習指導案の工夫の重要性を知り、魅力ある授業設計の仕方等を習得します。また、「算数の基本問題小学6年」の問題を解く練習をします。			◎	○
初等教科教育法（理科）	2	2	後期	T	自然科学の学修は、自然現象をありのままに観察することから始まる。本大学付近の里山で栽培した植物などについて植物に関する基本的事項を学修する。また、初等教育理科で必要な基本的な実験技術・操作を習得する。そして、実験・観察を中心に予測、観察・実験、考察といった問題解決的な授業展開が できるような資質、能力を育成する。また、理科授業の中で評価をどのように行うか学修し、的確に支援することのできる指導力を身に付けることを目指す。			◎	○
初等教科教育法（生活）	2	3	後期	T	小学校学習指導要領に定められた「生活科」の学習指導内容の理解をテーマとして、小学校 1、2年生が具体的な活動や体験を通じて、自分と身近な人々や社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自己の生活について考え、生活上必要な習慣や技能 を身につけ、自立への基礎を養うことができるよう指導するための教育指導方法について学ぶことを目的とする。また、「社会科」や「理科」、「図画工作科」などの他教科との関連についても学ぶことができる。			◎	○
初等教科教育法（音楽）	2	3	後期	T	音楽科の授業では、音楽活動を通して子どもたちに音楽への興味・関心を持たせ、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにし、生涯にわたって音楽を愛好するための素地とな る諸能力を身につけることを目標としている。そのためには、 子どもとともに生き生きとした音楽活動を展開できる力量が必 要である。子どもたちみんなが参加して楽しめるよう、子どもにとって音という媒体の持つ意味、子どもの成長過程における音楽の意味を学び、授業の展開方法を検討し ていく			◎	○
初等教科教育法（図画工作）	2	3	後期	T	初等教育における図画工作の意義や役割、目標と内容、歴史 などの理論と学修指導計画と評価について学ぶ。さらに学習指 導の実践に向けて〈造形あそび〉〈絵（版）〉〈立体〉〈工作〉〈鑑 賞〉の5つの領域において学年毎に児童の発達に沿ったふさわ しい事例を知り、授業計画案の作成手順と事例を学ぶ。			◎	○
初等教科教育法（家庭）	2	3	後期	T	小学校家庭科を指導する上で必要な基礎的・基本的な知識と技術を習得することを目的とする。小学校家庭科の目標及び家庭科の特質を踏まえ、「家庭生活と家族」、「日常の食事と調理の 基礎」、「快適な衣服と住まい」、「身近な消費生活と環境」の学 修に関しての具体的な授業の組み立てを、学習指導案の作成や 評価計画の作成を通して身につける。また、現代の子どもたち を取り巻く社会の現状と課題を踏まえた、子どもたちが主体的に学び活動できる家庭科の授業を創造する指導力を養う。			◎	○
初等教科教育法（体育）	2	3	後期	T	本講義では、体育科の目的・目標を歴史的変遷から概観し、 現在求められている体力・運動能力、および健康観を理解する ことから、実際の授業で取り扱われる内容とその教授法、保健 領域への取り扱い、評価の問題についての理解を目的とする。			◎	○
初等教科教育法（英語）	2	2	後期	T	・小学校英語の目標や内容について理解し、小学校英語を指導する上での基礎的・基本的な知識や技能を習得することができる。 ・外国語活動との系統性を持たせた小学校英語の授業の在り方を考え、教育者としての指導観を持つことができる。			◎	○
教育原論（初等教育）	2	2	後期	T	教師には、教科等の指導、生徒指導などの技術だけでなく、「人間とは、教育とは、学校とは」といった命題への正しい理解が必要である。学校現場が抱える課題に対応していくためには、広い視野と深い専門的教養、実践的力量を備え、かつ省察 力のある教師が求められている。「教育原論」は、教育の理念、 目的、内容、方法などについて学ぶもので、教職に関する科目 群の中でも中核的な位置を占め、とりわけ重要な役割を担って いる。この授業では、テキストをもとに、「人間とは、教育とは学校とは」といった、非常に大きな概念を学習することになるそして、その学習を通して、各自が自らの考えをもち教育の未来を展望すること	◎	◎		○
教職論（初等教育）	2	1	後期	T	子どもの成長を助け、その成長をもって自己の喜びとする仕事が「教職」にほかならない。その意味において、教職は、 じつに人間的な仕事であるとともに、とても責任の重い仕事と言える。それだけに、教職とは何かをしっかりと理解したうえで教職に向いているかどうかを真剣に考えていただきたい。「教職論」は、1998（平成 10）年の教育職員免許法の改正を機に、教職課程の必須科目として設けられた。遡ること 10年、1988（昭和 63）年の教育職員免許法の改正では、「特別活動」や「生徒指導」などの科目が新設されている。しかし、履修単位数を増加しさえすれば、教員の資質力量が高まるというわけではない。知識よりも、むしろ教員の人間性を重視すべきであるという主張を受けて新設されたのが、この「教職論」なのである。したがって、この授業では、教職の実際やその社会的使命について学び、さらには、学校教育が当面している今日的課題を多角的に取り上げ、それらを自らの問題として考えてもらうことを意図している。	◎	◎		○
教育行政学（初等教育）	2	2	後期	T	教育行政とは、国や地方公共団体が教育政策を実現するため教育法規を基礎に教育制度を運用し、教育条件の整備と教育活動の規制・助成を行なうことをいう。教育行政が現実にどのように行なわれているかということも、教育行政学の重要なテー マだが、教育行政は教育法規に基づいて行われるので、教育法 規が教育行政学の基礎となる。基礎を知らなくては、現実を的 確に見ることはできない。この講義では教科書をもとに、教育行政の基礎となる教育法規の基本をマスターすることを目的としている。	◎	◎		
特別支援教育（初等教育）	1	3	前期	T	特別支援教育では、特別支援学校や、保育園、幼稚園、小学校等において、様々な障害のある幼児・児童ひとりひとりのニーズに応じた適切な指導と支援が求められている。本科目では、特別支援教育の対象であるそれぞれの障害の理解と指導内容・方法等の基本的事項について解説する。	◎	◎		
教育課程論（初等教育）	1	2	後期	T	本講義では、教育課程とは何か、国の基準、教育課程の編成 及び実施、教育課程実施上の配慮事項、教育課程編成の手順と 評価、教育課程編成の歴史などについて考察します。	◎			
道徳教育の理論と方法（初等教育）	2	3	前期	T	この授業では、ひとつには、道徳教育のねらいや意義を理解すること、もうひとつには、道徳教育が、期待される役割を果たすのに必要な指導の原理と技法を習得すること、を目的にしている。前者に関しては、学習指導要領を手がかりに、道徳教育の目標や内容、指導上の諸規定を理解することから始めねばならない。その際、戦前、戦後の道徳教育の歴史を通覧することは、道徳教育の現在を定位するうえで、有益な示唆を与えてくれるはずである。また、後者の、実践を支える基礎原理を習得するには、道徳性の発達に関する諸理論に通暁する必要がある。さらに、道徳教育の実践という意味では、学校における道徳教育の全体構造や、道徳教育の授業理論や指導法を学修し、実際に指導案を作成することができるようにする。	○	○		○

特別活動及び総合的な学習の時間の指導法(初等教育)	2	2	後期	T	特別活動は、実践的な集団活動を通して学ぶところに特徴がある。この教育方法上の特徴ゆえに、教科指導や他の教科外活動とは異なる目標の達成が特別活動に期待されることになる。 そこで、この授業では、(1)特別活動の歴史、改善点、目標、意義(2)特別活動を構成する学級活動、児童会活動、学校行事、クラブ活動の目標や活動内容(3)学級活動の理論と実践(演習として指導案の作成)(4)学校が抱える課題と特別活動の役割について学修する。	○	○		○
外国語活動	2	3	前期	S	小学校で初めて外国語に触れる機会を持つわけであるから、これから中学・高校に進み英語を習得させるにあたって重要な 外国語で話すことは楽しいと思わせることに重点を置く。そのため比較的容易に習得できる単語をまず習得させ、ゲームなどを通じて実践的に定着させるような授業を行うやり方を一緒に 考えていきたい。こういう授業なら興味を持ちながら外国語を 学んでもらえるのではないかという方法を限られた単語や言い回しを使って工夫することをテーマとしたい。			◎	○
幼児理解	2	1	前期	T	幼児教育は、保育者の専門性の中核である。まず初めに、子どもを理解するために、絵本や実践記録から子どもの姿を知る 次いで、幼児教育においては、子どもというものはどういう存在であるかと考えている“子ども観”、子どもが発達するとはど ういうことかと考えている“発達観”、子どもが発達するために はどのような援助や働きかけをすればよいと考えているかという“保育観”が密接に関連していることを学ぶ。そして、観察や保育記録から保育の過程を知り、それを通して子どもの「内なる世界」を客観的に理解する方法を学修する。また、保育者 が子どもを理解するための援助とカウンセリングマインド、子ども・家庭支援及び家庭連携について学ぶ。さらに、子ども理解の歴史についても学修する。これらにより、人間の長い歴史の中で絶えず変化を続けてきた“子ども観”の多様性を知るとともに、一人ひとりの子どもを援助し、その実像に迫ることができる方法を理解していく。	◎	◎		○
教育の方法と技術(初等教育)	2	2	後期	T	教師の仕事の中核は授業です。「教育職員免許法施行規則」の改正により、この科目は、実践に直結する内容の科目に衣替えしました。学校教育が生み出された最も大きな目的は、子どもたちに「生きるために必要な知識・技能」を身につけることで あり、そうした知識・技能を系統的に育てるのに最もふさわし い場が授業であるからです。実際の授業設計に当たって大切な ことは、次のことです。　子どもの興味関心を引きつける導入の在り方、学修のねらいを達成するための多様な指導方法などを駆使した展開の在り方、子どもに学習意欲を持続・発展させるための終末の在り方です。	◎	○	◎	○
生徒・進路指導論(初等教育)	2	3	後期	T	少子化・核家族化、子どもの貧困問題、虐待、地域社会の教育力の低下など、わが国の教育は様々な課題に直面している。また、学校教育においては、いじめ、不登校、暴力行為等生徒指導上の諸問題、学力問題なども喫緊の課題となっている。文部科学省は、2010(平成 22)年 3月、『生徒指導提要』を公表し、組織的・体系的な生徒指導の取り組みを進めることを求めている。このように、生徒指導の果たす役割は極めて重要に なっていると言える。生徒指導と言えば、問題行動等に対する 指導を想起することが多いと思うが、本来は「一人一人の児童 生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動」(「生徒指導提要』p1)である。学習の開始にあたっては、この生徒指導の目標や生徒指導の機能をしっかり捉え直していただきたい。その上で、今日の子どもたちの実態や子どもたちをとりまく環境の変化をもとに、生徒指導・進路指導の今日的課題を踏まえた実践についての知識・理解を深めることが大切である。	◎	◎		○
教育相談の基礎(初等教育)	2	4	前期	T	学校場面において主に教師がおこなう教育相談の基礎的理論や技法、留意点を学ぶ。教師は生徒の他、親や他の教師を対象に教育相談をおこなうことがある。また、生徒への教育相談においては学業、進路や生活上の諸問題など扱う内容が多岐にわたる。こうした点をふまえ、本講義では相談のための基礎的理論や技法として教育カウンセリング等で示されている知見を紹 介し、さらに指導者としての役割を保って生徒の教育相談にあ たる場合の留意点、親や他の教師に対して教育相談にあたる場 合の留意点や連携のあり方、さらに特別支援教育との関わりや専門機関との協力について学ぶ。本講では、教科目標を達成するための内容構成の考え方、指導計画の作成、授業の展開方法等について論じるとともに、受講生自らの生活体験を振り返らせながら子どもたちの生きる力を育むことの意義について考察する。		○	△	◎
介護等体験の研究	1	2	後期	T	介護等体験の意義・目的の理解と、体験施設の概要や活動内 容を把握すること、あわせて教職意識の明確化を図ることを目 標とし、学校や施設の概要やそこでの介護等体験における注意 事項等を学ぶ。				○
教育実習指導(初等教育)	2	3	前期	S	教職課程では、教職に関する知識・理論および基礎的な技術の習得を意図して、さまざまな講義や演習が開講されている。しかし、知識や理論を座学で知っただけでは、教育者としての実践的力量の形成はおぼつかない。そこで、教育者に求められ る実践的な能力や倫理性の基礎を、幼稚園や小学校など、実際 の教育現場に身を置くことによって、育成しようというのが教育実習なのである。その意味において、教育実習は、期間としては決して長くはないが、教職課程においてきわめて重要な役割を担っている。		◎	◎	◎
教職実践演習(幼・小)	2	4	後期	S	教科および教職に関する科目の履修状況をふまえ、教員として必要な知識技能を修得したことを確認する目的で、4年時の後期に開設するように規定されていることからして、教職実践演習は、これまで受講してきた教職課程教育の総点検と総仕上げの役割を負っている。「教師に求められる資質・力量」につい ては、いまだ定見はない。しかし、各人が各様に表明してきた 見解を分析すると、主要な構成要素は、(1)教師としての使命 感や責任感、教育への情熱をはじめ、(2)社会性や対人関係能力、(3)幼児や児童の理解、(4)幼稚園ないし小学校における指導力などに集約することができる。したがって、問題は、それらが、単に知識としてのみならず、実際に”使える力”として身についているかどうかである。		◎	◎	◎
教育実習Ⅰ(初等教育)	2	3	通年	J	教職課程では、教職に関する知識・理論および基礎的な技術 の習得を意図して、さまざまな講義や演習が開講されている。 しかし、知識や理論を座学で知っただけでは、教育者として の 実践的力量の形成はおぼつかない。そこで、教育者に求められ る実践的な能力や倫理性の基礎を、幼稚園や小学校など、実際 の教育現場に身を置くことによって、育成しようというのが教 育実習なのである。ただし、教育実習は、単なる体験ではない 物見遊山に幼稚園や小学校にに出かけて、教育現場を見てきた というだけでは、教育的意味は乏しい。その意味において、教育実習は、教職課程においてきわめて重要かつ固有の役割を担っている。		◎	◎	◎
教育実習Ⅱ(初等教育)	2	3	通年	J	教育実習Ⅱは、教育実習Iの経験をふまえた上で、教育者と しての実践的力量の形成を図ることを企図している。すなわち 幼稚園・小学校に身を置き、幼児教育および児童と向き合うこ とで発達の実際や接し方について理解を深め、また、みずからの頭脳と五感をありったけ働かせてみることで教育活動の醍醐味や奥深さを感得してもらう。幼稚園実習では、担当教員の指導を受けながら、見学・観察・部分保育、全日保育、研究保育 などを順次体験することになる。また小学校実習は、見学・模擬授業・研究授業などから構成される。		◎	◎	◎
相談援助	1	3	前期	S	この授業は援助者としての資質を養成し、援助能力を向上さ せることを目的としている。クライエントとの信頼関係を形成 し、援助的なコミュニケーションを通して共感的かつ正確に問題を理解し、望ましい問題解決の方向へクライエントを導ける 技術を身につけることが肝要である。援助者として望ましい倫理観や価値観を学び、傾聴や受容・共感的なスタンスを身につけ、社会資源の知識を学び、アセスメントやエンパワーメントグループの活用、記録作成などの技術を学修する必要がある。		○	◎	△
保育相談支援	1	3	後期	S	この授業では、保護者支援の方法について学ぶ。保育現場での保護者の抱える問題について理解し、対人援助技術であるカウンセリングやソーシャルワークの方法を学ぶ。援助者としてのコミュニケーション能力を身につけることが肝要である。面 接を通して共感的かつ客観的に理解すること、信頼関係を通してクライエントを支持しながら問題解決に導いていくプロセスを知ることが大切である。事例解釈やグループワーク、エクササイズ、ロールプレイなどを用いて、対人援助技術を身につけていく。		○	◎	△

	子ども発達教育演習Ⅰ	1	3	前期	S	子ども発達教育演習Iは、子どもの保育・教育に関する理論 的考察や実践の方法論について学ぶが、各専任教員の専門領域 における様々な演習内容によって構成されている。演習内容に ついては、保育の理論と実践方法論、幼児教育の理論と実践方法論、小児体育の理論と実践方法論、幼児の図画工作指導論と 実践方法論、幼児音楽指導論と実践方法論、児童家庭福祉論と 実践方法論、家族福祉論と実践方法論、障害児福祉論と実践方 法論、社会的養護の理論と実践方法論等があり、原則として受 講者は任意に特定の演習授業を選択受講して学ぶ。		○	◎	◎
	子ども発達教育総合演習Ⅱ	1	3	後期	T	子ども発達教育演習Ⅱの内容は、子ども発達教育演習Iと同様に、保育の理論と実践方法論、幼児教育の理論と実践方法論 小児体育の理論と実践方法論、幼児の図画工作指導論と実践方法論、幼児音楽指導論と実践方法論、児童家庭福祉論と実践方法論、家族福祉論と実践方法論、障害児福祉論と実践方法論、 社会的養護の理論と実践方法論等で構成され、子ども発達教育 演習Iにおいて選択受講により学んだ子どもの保育・教育に関する理論的考察や実践方法論について、さらに理解を深め実践力を函養するために各領域における保育・教育の研究課題や実践課題等を通じて考察を深めるとともに、各種の保育・教育実践モデルや実践例について学ぶ。		○	◎	◎